

# 私と成城大学（思い出すまま）

信 岡 資 生

- ある方から頂戴した葉書の宛名は、世田谷区成城6—1—20 信岡資生 であった。それでもちゃんと手もとに届いた。
- 私のワープロでは「せいじょう」と打って変換キーを押すと先ず「成城」と変わる。その次ぎから「正常」「清浄」「性状」「政情」の順に変わる。
- 某書を読んでいて偶然中国の『詩経』の中の長詩『瞻卬（せんぎょう）』の一節

哲夫成城	哲 <sup>よ</sup> き <sup>おとこ</sup> 夫は城 <sup>つく</sup> を成るも
哲婦傾城	哲 <sup>よ</sup> き <sup>おんな</sup> 婦は城を傾く

に出会い、これが「成城」の語の由来であると知った。諸橋轍次著『大漢和辞典』（大修館書店 昭和31年）を引くと、「傾城」はあっても「成城」は立項なく、ただ「哲夫 テフ」の項に上掲の詩行の引用があり、「利口な男は城を盛にするが、利口な女は却って城を滅亡させる。城は、都城の意。婦人の利口すぎるのは禍をなすといふ喩」と記されてある。この記述に従えば、キャンパスによき女子学生の群れ集う成城大学の将来を懸念し、よき女性に出会うことの多い成城の街の行く末を案じなければならぬ。因に「傾城」は他にも出典があつて、必ずしも「成城」と対句を成すとは断じ難いが、それにしてもこの詩行を今日の成城大学の学生に紹介して、これが成城の原点だなどと言うわけにはとてもいかない。『成城学園80年』が成城の語源に触れないのも道理である。ただ創成期の記述に「軍人志望者の養成……をめざしていた私立成城学校」とあるところに、硬派のイメージが自ずと漂っている。

- 塚本哲三編輯『漢文叢書』（有朋堂書店 大正13年）で『詩経』の注解（この本では詩題『瞻印』の読みが「せんこう」になっている）に当たってみると、哲夫は「智慧ある男子なり」、「城は國也、能く國を立つるをいふ」、哲婦は「智慧ある女なり」、「城を傾く」は「國を覆へすをいふ」で、哲婦とは幽王を魅惑して周を乱す基となった妖女「褒姒」を指し、女性一般論ではないそうであるから、成城の前途を憂う必要はないとわかって安心した。
- 山田直己教授が届けてくださった目加田 誠著『定本詩経訳注（下）』（龍溪書舎 昭和58年）によると、『瞻印』の読みはやはり「せんぎょう」で  
哲夫成城      哲さとき人は國を興せど  
哲婦傾城      哲おんなき婦は國を滅ぼす  
注に「哲婦とは箋も朱子も褒姒のこととしている」と記してある。
- 「成城の学生はとにかく楽しんでい」と、今は亡き旧制広島高校時代の恩師羽白幸雄先生がよく洩らしておられた。「ここは成城樂園、成城遊園なんだ」と。
- このことを大林宣彦監督が『きみがそこにいる A Seijo Graffiti』で如実に映像化して見せてくれる。ここには図書館で読書する学生、教室で机に向かっている学生、パソコンでレポートを作成している学生などは一人も登場しない。アカデミックな学風は成城キャンパスには吹いていないみたいである。
- 「成城の学生は教室の外では実によいやつばかりだが、教室の中ではからしきだめなのが多い」とは、ある先輩が洩らした感想だが、私もその通りだと思う。
- 教室の中でよりも教室の外で出会うことのほうが多かった学生の一人 M君の結婚披露宴に招かれたとき、列席者名簿の私の肩書きが成城学院大学教授となっていた。仲人さんの花婿紹介でも「新郎は成城学院大学

のご卒業で」とやっておられた。もしかするとご本人自身、今でも自分の出た大学の校名は成城学院大学だと思っているのかもしれない。

- 成城大学の卒業生の結婚の媒酌は5組務めさせていただいた。いずれも幸せで健全な家庭を築いていらっしゃる。他にも結婚披露宴に招待されたことは多々あって、教師冥利につきることである。
- 小規模ながら堅実な経営で知られる語学書専門の出版社のF社長が、成城大学の出身であることに長いこと気付かなかった。それも経済学部卒業である。そう言われてみれば成城の卒業生らしい。F社長と教室の中でお会いしなくてよかったと思う。
- ある日校門を出かかったところで一人の剽軽な男子学生に「先生お誕生日おめでとうございます」と挨拶された。その日はまさに私の誕生日であったのだが、どうして彼がそのことを知っていたのか、わからない。
- 月刊『基礎ドイツ語』の編集長だったとき、加藤一郎学園長に寄稿をお願いしたことがある。編集後記の執筆者紹介で「園長先生と書いたら、雑誌の発売後、幼稚園の園長みたいだ、学園長と書いてほしかった、と言われた。
- この語学雑誌の表紙を毎号各大学の女子学生の写真で飾ろうと企画した年があった。たまたまその前年の学園祭にミス・キャンパスに選ばれた学生を知っていたので、研究室に来てもらったところ、目の下に大きな青黒いあざをつくっている。訊けばアイスホッケーの練習でスティックが当たったとのこと。出版社に電話して時間的余裕を確かめてから、締め切りぎりぎりの一週間後の再会を約束し、その間になんとかあざを消してくれた彼女の撮影を終えて無事発売日に間に合わせた。彼女は現石黒賢夫人である。その賢さんも一年の必修授業だけでなく、外書講読から経済書講読まで3年間つきあってくれたから、ドイツ語が嫌いではなかったようだ。なおこの雑誌の別の号の表紙では、当時上智大学の学生だった現横綱貴乃花夫人が笑顔を見せている——余計なことだが。

- 毎年正月に江戸千家の初釜に招かれて出かけて行く。蓮華庵当代家元の御曹司紹雪氏が成城大学の出身で、かつレストロ・アルモニコ管弦楽団のOBという関係からである。紹雪氏にアルザスの日本文化センターで茶会を催してもらうことを企画したが、都合で残念ながら沙汰止みとなったこともあった。茶道には全く暗く、とりわけ長時間の正座に苦しむのを見て、若宗匠はやさしく、どうぞお楽にお楽に、と言ってくれるのに甘んじて無遠慮にも膝を崩すことにしている。そんな私が去年の初釜では余興の福引きに当たって家元の書を頂戴した。
- 今年の初釜で紹雪氏から聞いたのだが、茶道部の指導に毎年大学へ出向いていたのが、部員がいなくなったとかで、この頃出向いていません、とのことであった。淋しげに話されていた。
- 入試準備委員会で、将来の19歳人口減少に備えて、他の私立大学がどのような対策を立てているのか、調査に出向いたことがある。某大学では、「成城さんは何一つなさらなくてよろしいのでは。志願者減少を心配して必死になって対策を立てなくてはならないのは、うちみたいな知名度の低い大学のことです」と言われた。あれはお世辞ではなく、むしろ牽制だったのかもしれない。
- 成城大学の専任となってほどなくして、『学生生活』の『黎明（めありひと）』欄に何か書いてほしいと依頼された。その当時は「めーる りひと」だったので、原稿の中で、現代ドイツ語の話しことばではrは母音化されるのが普通だから、「めーあ りひと」のほうがよいのでは、とさりげなく進言してみたところ、早速現行のように改まった。昨年秋の公開講座で、ゲーテが死に際にほんとうに「もっと光を（めーあ りひと）」と言ったかどうかの話をしたとき、ふとこのことが思い出された。
- 以前勤めていた中央大学の図書館を現在でもときどき利用させてもらっているが、長い休みの終わったある日、いつものように本を目録カー

ドで探そうとしたら、カード・ボックスはどこかへ消えてしまってコンピューターで探すようになっていた。パソコンが扱えない私には大きなショックだった。このことを教授会で隣席の故中村英雄先生に話して、その点まだ成城大学はお互い安心でいられますな、と言って笑っていたら、その教授会で本年度から新しく受け入れる書籍は従来のようなカード目録を作らず、コンピューターで検索するシステムに改めるとの報告がなされた。啞然として思わず顔を見合わせ苦笑した。

- いつの頃からか毎年秋に実施される教職員の定期健康診断を受けないことにした。ただでさえそれほど丈夫でない胃腸なのに、検査のためにバリウムなど通すと傷ついていっそうおかしくなる、と判断したからである。これは手前勝手な推測ではなく、実際胃の検査のあとではいつも一週間位は狂った胃の調子が戻らなかったのである。検査をさぼっていてもどこからも文句はこなかったし、また私も健康障害で長期欠席することもなく済んだ。
- 6年前と3年前、甥の勤務する川崎の大学病院で人間ドッグ入りして2泊3日徹底的な検査をしてもらった。健康管理を怠っていたわけではない。
- 自宅から成城大学へ通うには、東急田園都市線のつくし野駅から、①溝の口—J R南武線登戸—小田急線 ②長津田—J R横浜線町田—小田急線 ③二子玉川園—バス ④中央林間—小田急江の島線 の4つの方法がある。どのルートをとどっても1時間前後で大差はないから、その日の気分次第で切符を買い求めるが、①や④のことが多い。③は乗り換えが一度で済むのだが、時間帯によっては渋滞に巻き込まれて随分時間がかかるから、よほど時間に余裕があるときでないと利用できない。そう言えば、昭和40年代の中頃南武線に溝の口—登戸間ノン・ストップの快速電車登戸行きが走っていたが、あれはどうして廃止になったのだろうか。

- 金曜日を除き、大学の昼休み時間は短くて、外へ食事に出る暇がなく、つい学内の教職員食堂で済ませることになるが、値段が安くて教員仲間の間でも評判は悪くない。年齢をとってくるとご飯の量が多過ぎて、もっと減らしてください、といつも頼むようになってしまうのである。以前大学のつい目と鼻の先に「葡萄屋」というレストランがあって重宝したものだ。現在もその建物は、地上の円筒形の外観を変えないまま角に建っているが、某俳優の家とかで、地下に客席があって、食事ができたほか、簡単な服飾品も並べて販売していた。
- 3号館地下を改築してLLセンター教室・設備を整えたとき、他の職場の同僚から孤立して地下で執務する女性職員の万一の危険を考慮して、学生部に接続する緊急ベルを設けた。あるときこのベルが鳴り響いた。学生部の屈強の若い男性職員が押っ取り刀で駆け付けたところ、センター委員の先生が、これを呼び出しボタンと誤認して、職員の姿が見えないので押されたものと判明した。
- LL施設や図書館はまずまずだが、校舎は7号館や5号館を除くとお世辞にもよいとは言えない。大学の校舎としてはあまりにも貧弱なことは、他の大学と比較するとはっきりわかる。教育は外観や建物ではない、中身で勝負だ、とは口先だけの遁辞である。毎年大学案内パンフレットの表紙を飾る写真に関係者は苦勞しているようである。
- アルザスでは所用も兼ねてライン河の独仏国境をしばしば車で往来した。税関の警備官の旅券審査は、厳しいときもあったが概して緩やか（つまりいい加減で形式だけ）のことが多かった。欧州統合が進む過程で税関はもちろん廃止され、今年7月通過してみたら税関跡はマクドナルドの店舗となっていた。旅券をホテルに置いたままの中村 完短大学長を乗せて、行きと帰りの二度通過に冷や汗をかいた思い出がある。
- レストロ・アルモニコ管弦楽団創設30周年記念に、小沢征爾氏に1曲だけ指揮をとってもらう話が出て、小沢氏と直接面談交渉、マネージャ

一格の人も同席の上やっと日取りも決まり、部員の学生たちも大喜びで準備万端整えていたところ、演奏会の直前になって肩の腱鞘炎とかでドクター・ストップがかかって中止になった。残念な思い出の一つである。「ギャラはいらないから」とおっしゃってくださった小沢氏のきさくな人柄がいつそう印象に残った。

○ 伊勢原の総合グラウンドが完成してまだ間もない頃、担任クラスの学生と出かけたことがある。夕食後和室でコンパになった。宴たけなわの頃、ベランダに出ていた一人の学生がガラス戸を破って部屋に入ったため、破片が飛び散り、盛り上がっていた気分も醒めてしまった。ガラスが目にとまらず、戸があることに気付かなかっただけで、回りの心配をよそに、本人は傷一つ負わなかった。この事件のためだけではないだろうが、教師が臨席すれば暗暗裡に認めていた伊勢原寮での学生の飲酒も今は厳禁となっているようだ。

○ 入試管理委員だったある年の入試で、いたずらに電話に振り回されたことがあった。外国語の試験中控室に待機していたら受験生の兄と名乗る男から電話があり、祖母が交通事故で入院したので本人に受験をやめてすぐに病院へ来るよう伝えてくれ、という。先方の告げた受験番号の受験生は確かに受験中であった。だが考えてみると、入試は受験生当人にとっては一生を左右するほどの大事であり、親の死に目にも会わぬほどの覚悟でかかるのが普通であろう。祖母の入院で受験を放棄させる肉親がいるだろうか。傍にいた上野 格教授の助言もあって、念のため彼の挙げた病院へ電話して訊いてみたところ、今朝は事故で担ぎ込まれた患者はいないとのこと。そこで今度は受験生の自宅へ電話してみると、なんと留守番しているおばあさん自身が電話口に出てこられた。そうこうするうち兄と称する男からまた電話が入って、弟をもう帰してくれましたか、と催促である。「きみはいったいだれなんだ」と少しきつい調子で問うと、電話が切れて、そのあとはもうかけて来なくなった。あとで

判明したことだが、何かの恨みを持った近所に住む者の企んだ受験妨害工作だった。電話を真に受けて受験生に受験を放棄させていたら問題になるところであった。

- 年輩者から聞かされる昔の話は、話しているご当人は好い気分かもしれないが、聞き苦しい場合が多い。宴会のスピーチなどでそれがよくある。昔の話は、話すべき現在や将来を持たない者のすることだと、意識して回顧旧談の類はできるだけしないように心がけてきたが、年齢を重ねるごとに、特に若い人に対してつい昔話が出てしまう自分に気付いて愕然とする。相手はさぞかし老人の繰り言として我慢して聞いてくれているのであろう。
- 記憶違いでなければ、英国の推理小説で古典作家の一人ノックスの書いたものの中に、ロンドンの地下鉄A駅を定刻に発車した電車が隣のB駅に定刻通り到着するのは確実に当たり前どころか、途中起こり得る天変地異や人災事故、当世流に言うならレールのボルト外しやサリンの散布など、ありとあらゆる予想外の突発的支障を考慮すると、これ以上不確かなことはない、というのがある。この場合確率を持ち出すのは何の意味も持たない。確率は一般論であって、該当者にとっては常に百パーセントなのだから。この考え方によれば、私がこの世に生まれ、平穩無事に成長し、何故かドイツ語に携わることを生業とし、縁あって20年もの長きにわたり成城大学で多くの教職員の好意に恵まれ、今日があるのは、日々刻々の大いなる偶然の幸運な重なり連続によるもので、靈妙希有な奇跡であったとしか言いようがなく、この天運の気紛れに感謝しなくてはならない。